雑学書庫 知識の記録

大人は違う学び方をする――アンドラゴジー（Andragogy）

記事のURL

https://www.gklibrarykor.com/ja/article/11375/

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

会社の研修で講師が教科書を開き、最初から順番に読み上げていくと、多くの人はすぐに退屈してしまいます。ところが同じ人たちも、明日の会議ですぐに使うExcelの機能を学ぶときには、目を輝かせて次々と質問します。なぜ大人は、学ぶ内容が自分の仕事と結びついているときにずっとよく学べるのでしょうか。この問いに答えようとする代表的な教育理論が「アンドラゴジー（Andragogy）」です。 アンドラゴジーとは、簡単に言えば「大人の学びを支援する技術と学問」を意味します。ギリシャ語で大人を意味する「アンドロス」と、導くという意味の「アゴゴス」を組み合わせた言葉で、子どもを導くという意味の「ペダゴジー（Pedagogy）」と対をなします。1833年にドイツの教育者アレクサンダー・カップ（Alexander Kapp）が初めて使い、アメリカの教育学者マルカム・ノールズ（Malcolm Knowles）が1960年代後半から成人教育の理論として体系化し、広めました。 本記事では、アンドラゴジーが登場した背景から、ノールズが示した六つの前提、日常や職場で見られる例、そしてこの理論をめぐる批判までを順に見ていきます。 大人はどのように学ぶのか ペダゴジーからアンドラゴジーへ 長いあいだ、学校教育のやり方は子どもを教えるペダゴジーを土台としてきました。この方法では、何を、いつ、どのように学ぶかをすべて教師が決